

「家族福祉相談室の活動から」

二昔、三昔前に比べれば、公によるケアはかなり手厚いものになってきていると実感します。専門家の養成機関も増え、各種専門家が手助けの必要な人々のケアとキュアに当たることが可能となってきました。高度成長の夢に酔いしれていた頃には見られなかった充実に、社会の成熟とはこういうことかと、古い人間としては感慨無量です。

私たち家族福祉相談室は素人の集まりで、大方は専門的な訓練を受けているわけではなく、ごく普通の生活者です。ではそういう私たちにはもはや出番がないかというところ……実はそうでもありません。専門家によるケアがどんなに手厚くなっても、そこは人の世の常、さまざまなケアの網の目からこぼれてしまう人が残念ながら存在するのもまた現実です。例えば、家庭内の軋轢に悩む人、心の病を自覚せず苦しむ人、恒常的な貧困に疲れた人、相談相手を見つけられない人、複雑に絡み合った困難を整理できかねる人、孤独に心を押しつぶされそうな人など……こうした人々は、公の網の目からどうしても抜け落ちがちで、私たちが出会うのは、そういう人です。

家族福祉相談室は、素人であることを常に自覚しつつ、一人一人の相談に耳を傾けます。2000年前にイエスが始められた方法に倣い、ただただ苦しむ人の隣人でありたいと願うところから始めます。必要に応じて専門家の力を借りることはありますが、素人ならではの対等の目線を大切にします。3.11の後、被災地のかたが語っておられました。「どんな専門家の手当より、ただ寄り添って話を聞いてくれる人が必要です」理解し、共感してくれる一人がいることで、人間がどんなに強くなれるものか。ゆっくりと話を聞いてもらうだけで問題を整理でき、晴れ晴れとした顔で帰っていく人の存在は、私たちがよく体験するところです。

だからと言って、家族福祉相談室が100%の目覚ましい成果を上げているわけではありません。長いあいだ一向に問題解決の糸口を見つけられない事例もありますし、寄り添うことでいつの間にか客観性を見失っていることもあります。そんなとき頼りになるのは、冷静な意見を聞けるスタッフの会議や専門家のアドバイスを受けられるスーパービジョンです。「あなたはひとりではない」よく相談者に向けて語られるこの言葉は、そのまま私たちにもあてはまります。同じ時代、同じ船に乗り合わせた私たちが、喜びも苦しみも共有して旅路を行くことができますよう、復活の主に祈ります。

(酒井 育子)